

絶えず、人の住家一字もなし、適ま問ひくる物としては、梢を傳ふ猿猴なれば、少も留まる事なく還るさ急ぐ恨みなる哉、東は富士河漲りて浪沙の浪に異ならず。

身延の地勢は今も此通りであるが、今は人の住家一字もなし處ではない、堂塔伽藍は雲に連なり人家は櫛の齒を並べたやうであり、お負に此春から電燈が星ならざるに何の光ぞと云ふ有様に輝くことになつた、若し日蓮を地下に打起して今日の光景を觀しめたるならば、蒙古の來寇を豫想した彼も、此の如き世の變遷は想像だも出來なかつたと驚かるゝであらふ。

●身延山と比叡山

併しながら上記の二方面から見た身延山は畢竟日蓮の肉眼に映じた身延に過ぎない、然らば彼の心眼に映じた身延は如何、弘安五年十月七日彼が波木井其他の人々に與へた書簡に曰く。

釋迦佛は靈山に居して八箇年法華經を説き給ふ、日蓮は身延に居して九箇年の讀誦也、傳教大師は比叡山に居して三十餘年の法華經の行者也、雖然彼山は濁山也、我此山は天竺の靈山にも勝れ日域の比叡山にも勝れたり、然れば吹風もゆるぐ木草も流るゝ水の音までも此山には妙法の五字を唱へずと云ことなし。日蓮が身延山に對する自負否な自覺の大なる洵に驚くべきではないか、彼は身延を以て天竺の靈山に我比叡山にも勝れりと宣言したるのみならず、傳教の居せる比叡山を目して濁れる山なりと喝破せり、左りながら上行菩薩の再來なりとさへ自覺せる日蓮が、身延山に對する此位の自覺は怪しむに足りないかも知れぬと書き了つて、後を顧みると、身延で少々道草を食ひ過ぎた去來筆路を他に轉じ申さん。

「道」第66号(1913, 10)

宗教講話〔其十四〕

大川周明

二 マホメット上

マホメット正しくはムハムマッドは、紀元五七〇年若くは七一年四月二十日を以てメッカに生れたり。父をアブダラー、母をアミナと云ひ、其家はカーバの守護職を奉じて宗教上に重要な地位を占めたるクライシュ族に屬せり。二歳にして其父を失ひ、六歳にして更に其母を失へる吾が不幸なる孤兒は、祖父アブド・エル・ムッタリブの手に愛育せられしが、僅かに二年にして祖父も亦世を去りしを以て、更に伯父アブ・ターリブの家に養はるゝに至れり。ターリブは竟にマホメットの信者となる事なかりしも身を終ふるまで最も眞實なる保護者として彼の爲に盡せり。されど其家貧しくして且家族極めて多かりし

かば、マホメットは僅かに九歳の幼時より既に富家の牧童に備はれて山羊又は羊を追ひ、或は伯父を助けて商業に従事し、具さに世路の艱難を嘗めて人と成れり。然るに二十五歳の時に及び伯父の周旋によりてカデイージャと呼ぶ富貴なる寡婦の家に雇はれ隊商を率ゐてシリヤに往復せしが、カデイージャは其の才幹と美貌とを愛し遂に彼に向つて婚儀を申込めりマホメットは直ちに之に應じてガデイージャを妻とし、昨の窮措大は俄然として茲に富みて地位ある紳商となれり。時にカデイージャは齡已に四十にしてマホメットより長ずること十五歳なりしも、人と爲り賢良柔和にしてよくマホメットに事へ琴瑟頗る相和せり。

兩人の間には二人の男兒と四人の女兒とありしが、不幸にして末女フアタイムを除く外は悉く夭折した。而してマホメットは伯父ターリブに對する謝恩の至情より其子アラーを迎へて養子となし、フアタイムを以て之を娶したり。アラーは後に最も勇敢なる回教の戰士となり、遂に第四世回教々主の位に即けり。

マホメットの生涯の此の時期に關する吾等の知識は極めて貧寒にして、殊に彼の精神的發展に就ては何等の依據す可き記録をも有せず。然れども彼がエル・アーミン即ち律義者の綽名を有せるより推して其の性格の極めて忠實無私なりしを知る可く、また其の第二子をアブド・エル・モナフと名けたりしより推して當時に於ける彼の信仰が尙ほ在來の宗教を離れざりしを知る可し。蓋しアブド・エル・モナフとはモナフの僕を意味し、モナフとは亞拉比亞在來の多神教に於て崇拜せられたる神格の名なるを以てなり

にしてマホメットの信仰は外部よりせる刺激と内面よりの要求とによりて動かされたり。而して舊き信仰を失ひて未だ新しき信仰を得ざる悩みは、彼をして憂鬱なる冥想者たらしめたり。かくて彼は人なき丘陵の奥に入りて沈痛なる思索に耽りたり。或はまた死せるが如き沙漠の間に退きて斷食苦行せり。而して此の精神的苦闘の絶頂に於て彼は驚く可き天啓を受けたり。即ち時は紀元六一〇年ラマダンの聖月にマホメットはメッカに近きヒラー山上に觀行しつゝつありしが、一夜忽然として天使ガブリエルの一卷の書を携へて眼前に現はるゝあり。其書を彼に與へて讀めと命じたり。マホメット恐懼して讀むこと能はずと辭せしも、天使の三度び之を促すに及んで終に取りて之を讀めり。於是マホメットは自らアラーの豫言者として、半島の衆生を其の罪惡と迷信とより救ひ、之に向つて大能大愛の獨一神に對する信仰を鼓吹す可き偉大なる宗教的使命を自覺せり。時にマ

されど此後マホメットが其の卓越せる常識と多年の經驗とを以てし、竟に商業上に何等の成功をも遂ぐる事なく却つて家運の衰頽を招ぐに至りし一事は、明かに彼の生活が次第に宗教的色彩を帯び來りし事を證するものなり。吾等は彼の覺醒せる宗教的生活が何時の頃に始まりて如何に發展せしかを確實に知り難けれど、極めて敏感なる彼のこゝろが、當時暗黙の間に亞拉比亞の精神界に流れ居たる新しき要求を、最も鋭く力強く感じたりしは疑ふ可からず。殊に彼の親友にして妻カデージャの親戚なりしワラカ及びザイド・イブ・アムルの兩人は、共に當時の多神教を排斥して嚴格なる一神教を奉じ、清淨なる離欲の生活を以て理想とせる彼のハニーフ即ち懺悔者團に屬し居たり。マホメットが彼等との交際によりて得る所多かりしは固よりなる可く、また當時亞拉比亞に行はれたる猶太教及び基督教によりて刺激せられし所も尠なからざりしなる可し。かくの如く

ホメット 四十歳

是の如く彼が受けたる使命は多神教の亞拉比亞をして、世界の主、大慈者、大悲者、審判の日の王なるアラーを信じ、邪路を去りて正道を踏ましむるに在りき。然れども彼は之を以て決して新しき宗教を樹立せんとせしものに非ず、たゞ純一なる亞拉比亞本來の信仰を復活せしめんとしたりしのみ。而もその始めに當りて彼は己れが受けたる天啓の眞偽に就て極度の疑惑に陥り、悶々の極自殺を企てたる事さへ一再に止まらざりしが、幸に良妻及び二三友人の同情と慰撫とによりて、事なきを得たり。而して一度び天啓の確實を信じ自己の使命の偉大を自覺するに及んでは、最早何ものを以てしても動かす可からざる金剛の力を與へられたり。即ち宣言して曰く、假令わが右手に太陽を與へわが左手に太陰を與へて以て吾に神を説く事を止めよと云ふ者あらむも、神の教にして勝利を得ざる限り、若くは吾命の盡きざ

る限り、斷々乎として之を止めずと。
 是の如くにしてマホメットは豫言者として現はれ
 たり。されど當初に於て彼の信者となりし者は極め
 て少數にして、僅かに妻カデージャ、其女兒、甥ア
 リー、曾て奴隸たりしを釋して養子とせるザイド、
 及び其他の二三者ありしのみ。地位あるメッカ人に
 して最初に彼に歸依せるは唯だアブー・バクル及び
 オトマーンの二人に過ぎず。前者は公明誠實なる豪
 商にして後に第一世教主となれり。而して後者は後
 に第三世教主となりしが、當時マホメットに歸依せ
 るは、彼の信仰に動かされたるよりは寧ろ彼の美し
 き娘ルカイヤを得んが爲なりしなり。當時メッカ人
 は彼を呼ぶに狂詩人又は詐僞漢の名を以てし嗤笑と
 嘲弄と輕蔑とを以て之に對せり。
 如是の間に四年を経て、マホメットの信者は漸く四
 十を數ふるに至りぬ。於是彼は始めてメッカの公衆
 に向つて堂々と傳道を試み、メッカ人の迷信に對し

て最も忌憚なき攻撃を加へ、盛んに其の偶像崇拜を
 非難したり。然るに固とメッカの繁榮は偏へに多數
 のカーバ參拜あるに由りしと、一方には舊き信仰に
 執着するもの多かりしとの故を以て、マホメットは今
 や經濟的並に宗教的にメッカの破壊者を以て目せら
 れ、激烈なる迫害を蒙むるに至れり。されどマホメッ
 トは不斷にアラブ及び諸天使に慰められ敢然として
 偶像崇拜を排斥し多神教を罵倒して止まざりしかば
 迫害日に加はりてアブー・バクルの如きは一時難を
 アビシニヤに避けん事を奨むるに至れり。然れども
 一方に於てはメッカ人も亦マホメット及び其信者の到
 底尋常の手段を以て屈服し難きを知り、早く紛亂の
 局を結ばん事を冀ひ、若しマホメットにしてアルラー
 ト、マナート、エル・ウッサの三女神を拒否せざるに
 於ては、彼等も亦マホメットの豫言者たる事を承認す
 べしと提議せしかば、マホメットも之に従つて三女神
 を承認したり。されど翌日に至り天使ガブリエルの

激しく彼を非難するの聲を聴き、直ちに復た之を徹
 回せしを以て、兩者の反目は之によりて唯だ劇甚を
 加へたりしのみ。而も此間に於て彼は最も有力なる
 二人の信者を得たり。一は伯父ハムサにして、他は
 熱烈火の如き青年オマルなり。オマルは始め最も熱
 心なるマホメットの迫害者なりしが一日其妹のコ
 ラーンを誦するを聴き翻然としてマホメットに歸依
 し、アブー・バクルと相並んでマホメットの最も大切
 なる股肱となり後に第二世教主の位に即けり。
 かゝる間に兩者の軋轢は益々甚しきを加へメッカ
 人は遂にマホメット及び其信者に對して絶交追放を
 決議し、其宣告文をカーバの祠前に公示せり。於是
 マホメットの一族は其の信者たると不信者たるとを
 問はず皆生命の危険に迫りしかば、難をメッカの東
 方に在りてアブー・タリブの所有にかゝる偏長な
 る溪谷の間に避け、僅かに一年二回の聖期に於ての
 み安んじてメッカの市内に入る事を得たり。此の絶

交は二年の後に廢せられたりしもマホメットは依然
 として峻惡なる境遇に在り。迫害に堪えずして彼を
 去る信者はありしも、一人の新たに歸依するものな
 く、事情日々に非なり而も此時に當りて彼が最大の
 慰藉者にして『信者の母』たりし妻カデージャの死に
 次ぐに、彼が最後の保護者たりし伯父アブー・ター
 リブの死を以てせしかば、今やマホメットの窮迫は
 其極に達し、遂にメッカと繁榮を争へるタイフ市に走
 り、暫く身を此地に潜めんとせり。然るにタイフ人
 も亦激しく彼を排斥し、盛んに石を投じて彼を追撃
 せしを以て、マホメットは九死に一生を得て辛うじて
 メッカに歸はり。
 されど幾くもなくして幸運は窮餘の豫言者に微笑
 せり。局面一轉の機は近づけり。而して之を促がし
 たるものは實はヤトリブ人の歸依となす。抑もヤト
 リブは固と猶太人の領有なりしが、第五世紀の末葉
 に於て南方より襲來せるアウス及びカスラジの兩亞

拉比亞種族によりて征服せられたるものなり。従つてヤトリブには猶太人頗る多く、亞拉比亞人は彼等と接觸して其の宗教を知り得たり。而して猶太人が獨一の神ヤーエを信じ、救世主メシヤの出現を翹望するを知り得たり。彼等は是の如き信仰を教ゆる救世主の同一種族中より出でん事を希ふに至れり。而して當時ヤトリブは外に對しては激しくメツカと繁榮を競ひ、内に在りてはアウス、カスラジの兩族が不斷の私闘に苦しみたりしかば、彼等の爲に勝利と平和とを將來すべき亞拉比亞のメシヤを期待するの念は愈々その力を加へたり。此時に當りて彼等はマホメットの名を聽き、其の鼓吹する信仰の一神教なるを聽きて、此人或は吾等の救主なる可しと思ふに至れり。かくて一群のヤトリブ人はカーバ參拜の序を以てマホメットに至り、其教を聞きて大に喜び、直ちに彼の信者となり、歸りて之をヤトリブ人に告げたり。於是ヤトリブ人は兩族を代表する十二人を

撰び、次の順禮期に於てメツカ及びヤトリブの中間に位置するアカバに於てアホメットと會見せしめ、更に次の順禮期に於ては六十人の代表者を遣はし、堅く信仰を誓ふと同時に彼の來りてヤトリブに首長たらむ事を希へり。此等の交渉は總て秘密の間に行はれしも、メツカ人は幾くもなくして之を聞知せり、而してマホメットに對する憤激と嫉視とは其極に達し、遂に劍を揮つて彼の心臓を貫かん事を定めたり。マホメットが此の計畫を知りたるは刺客の既の彼の門に在りてその出づるを窺へる時なりき。彼はアブー・臥床に横へ己れの綠衣を以て之を蔽ひ、自らアブー・バクルと共に夜陰に乗じて後門より逃れ、メツカを去る約一里の所に在るタウルの洞窟に潜むこと三日、其間アブー・バクルの家人は毎多密かに來りて食を送りたり。而してマホメットに欺かれたるメツカ人は劍を提げて普ねく市の内外を探り彼を見出して其胸を刺さずば止まざらんとせり。一日彼等は兩人の潜

(4617)

匿せる洞窟の前に至り將に之を入りて其中を検せんとせしに、運命の知り難き一個の蜘蛛の網を洞口に張り、一羽の鳩の巢を洞中に作れるありしかば、穴中に人なしと信じて踵を回して去れり、此時アブー・バクル慄然として曰く、吾等は唯だ兩人のみと。而してマホメットは曰く、否更に第三者あり神これなり

と。かくて敵の去れる見て洞窟を出で駱駝に跨りてヤトリブに走れり。所謂ヒジラこれなり。ヒジラは遁逃の意味なり。時に紀元六二二年六月十六日にして回教々徒は此時を以て紀元となす。マホメットの齡五十二歳。

(4618)

日露戦争及媾和

(十)

石川 半山

義和團事變は明治三十三年の夏季に起つた北支那の騷擾で有る、我輩も此の騷亂の時に筆を載せて北支那に遊び、親しく其の時の實況を視察したから、大體の形勢は記憶に残つて居る。

考へて見ると此の騷亂は、支那人中の忠勇なる人物が演じた最後の活動で有つた、支那人の中で眞面目に君國の爲めに盡す心の有つた人物は、此の戦

忠勇なる人物

亂を限りて殆んど無くなり、支那人の大多數が、亡國の民の如き心となつて仕舞ふた様に思はれる。清朝も三百年天下を支配した者だ、昔から忠勇なる人物が全く無かつたとは思はれない、國家の危機に際して、慷慨義に就き、一身を顧みず、死を見る